

H23 農業（農村環境）専門回答文

- ・環境保全型農業の取組による農村環境の保全
技術的課題3つ以上と解決策についてあなたの考えを述べよ。

1、環境保全型農業の現状

環境保全型農業とは「農業の持つ物質循環機能を生かし、生産性との調和などに留意しつつ、土づくりや農薬低減を通じた環境負荷の軽減に配慮した持続的な農業」と言える。

我が国の農業は、終戦後の食糧増産を図るため、効率性を重視した農業を行なってきた。そのため、時間のかかる土づくりを怠り、化学肥料の大量使用、農薬の大量散布など、自然循環機能を損なう農業を展開してきた。これらにより、連作障害や病虫害被害を誘発してきたことは否定出来ない。

一方で、環境保全型農業が持続可能な農業展開には必要との認識が農業者に増えつつある。しかし、これらに取り組むエコファーマーは増えつつあるものの、基幹的農業従事者の10%足らずであり、人づくりが急がれる。しかも、エコファーマーを目指す農業覇者の間では、取組に見合うだけの収益が得られるのかが不安材料となっていて、参画へのモチベーションは上がっていない。このことから、エコファーマー増加のためには、収益性の向上が鍵を握っている。

2、課題

環境保全型農業の取組による農村環境の保全を、自然循環機能向上と人づくりの視点から課題を取り上げる。

2-1、自然循環機能の向上

- 1) 土づくりへの取組
- 2) 化学合成肥料の低減
- 3) 化学合成農薬の低減

2-2、人づくり

- 1)、施策を活用した人材の育成
- 2)、収益性向上による人材の確保

3、解決策

3-1、自然循環機能向上

1) 土づくりの取組

土づくりへの取組として、土中の微生物の活動を活発にし、物質循環の促進で肥沃な土壌を作るべきである。そのためには、前作のすき込みや堆肥の施用、緑肥作物（ソルゴー等）作付により、微生物の活動を活発にする土づくりを行うべきである。

2) 化学合成肥料の低減

化学合成肥料の大量使用は、地力の衰退を招くばかりでなく、農地からの流出による、農業用水の水質低下など農業生産環境を悪化させる。

このことから、化学合成肥料の低減には、土壌診断に基づく施肥量の決定や、1)全体施肥から局所施肥、2)苗箱施肥、3)緩効性肥料の使用、など施肥技術の高度化に取り組むべきである。

3) 化学合成農薬の低減

化学合成農薬の大量使用は、害虫の駆除とともに、有用な生物をも排除することにもなり、生物の多様性

による物質循環の機能が損なわれる。

このため、農薬使用の低減には、1)生物農薬（フェロモントラップ）の使用、2)圃場観察による適時、適切な防除体制の構築、3)病害虫に強い品種の開発、などに取り組むべきである。なお、将来的には、IPM（総合的病害虫管理）を導入し、経済性に配慮しつつ適切な手段を総合的に講じるべきである。

3-2、人づくり

1)、施策を活用した人材の育成

人づくりのためには、エコファーマー認定制度を活用した人材の育成を展開すべきである。この人材育成施策は、環境保全型農業の計画から実施、フォローアップまでを一貫して経験できることから、人材育成の理想的なプログラムと言える。なお、これらの参画を一層促進するため、自治体が中心となって、現役エコファーマーとの交流機会等のイベント企画を行うことも必要である。

2)、収益性向上による人材の確保

収益性を確保し、経営を安定させることが、長期的にも人材を確保することが可能となる。

このことから、1)環境保全型農業を通じた6次産業化への取組、2)増加傾向にある外食、中食へ対応した農産物の生産と販売、3)エコファーマーに対する直接支払制度の導入、などに取り組むべきである。